

古典に見える月（承前）

水谷 智洋

次は悲劇詩人です。

(13)-a Aiskhylos, *Agamemnon* 297-8

Κλ. ὑπερθοροῦσα πεδῖον Ἀσωποῦ, δίκην
φαιδρᾶς **σελήνης**, πρὸς Κιθαιρῶνος λέπας

クリ アソポスの川原もひと息に跳び越えて、
照りまさる月さながらに、キタイロンの嶺にむかって、²⁰⁾

アイスキュロス（前 525? - 456）作『アガ멤ノーン』（前 458 年上演）のなかで、アルゴス王アガ멤ノーンの妃クリュタイメストラ—Κλυταμήστρα が告知します。ギリシア軍はついにトロイアー軍を打ち負かした、と。なぜなら、トロイアーのイーデー山から発した狼煙^{のろし}のリレーが、5 箇所の中継点を経て、つい先刻、アルゴスにまで届いたからだ、というのです。

上記で「跳び越え」たと謳われるのは、第 4 番目の中継点、キタイロンの嶺で焚かれた狼煙です。しかし、その狼煙が当初の火勢そのままに、何十キロもの距離を進むはずはありません。その炎は次の中継点、都アルゴスの東の嶺アラクナイオンで、はるかな北東の地点で狼煙があがるのを目を皿のようにして待ち受けている見張りの者の目に、辛うじて認められる一点の炎にすぎないでありましょう。それを「照りまさる月さながらに」とは、誇張が過ぎましよう。地上のどこにしようとも、人の目に何の苦労もなく届く「照りまさる月」

光と何十キロもの遠方にあがった狼煙のかすかな炎とを、δικτην「さながらに」という語で並び立ててよいものでしょうか。疑問を禁じ得ません。

(13)-b Aiskhylos, *Hepta epi Thēbas* (lat. *Septem contra Thebas*) 387-90

- Αγ. ἔχει δ' ὑπέρφρον σῆμ' ἐπ' ἀσπίδος τόδε,
φλέγονθ' ὑπ' ἄστροις οὐρανὸν τετυγμένον:
λαμπρὰ δὲ πανσέληνος ἐν μέσῳ σάκει,
πρέσβιστον ἄστρον, νυκτὸς ὀφθαλμός, πρέπει. 390
- 使者 その楯にはこのような思い上った印をつけている。
巧みな細工の星に輝く大空、その真中に夜の目なる星の中でも
いちばん貴い月が満ちた面も皓皓と輝いている。²¹⁾

『テーバイ攻めの七将』（前 467 年上演）のなかで、使者が、敵将のひとり血気にはやるテューデウスが、今すぐにも川を渡ってこちらに攻めかかろうとしている、と報告したついでに、彼の楯の表の意匠に言及します。ここではすぐに (1)-b のアキレウスの大楯が思い起こされます。アキレウスの楯には、大地、海、太陽、満ちた月が刻されていましたが、こちらには大地と海がありません。その埋め合わせでしょうか、こちらの満月には「星の中でもいちばん貴い月」との賛辞が呈されています。

(14)-a Euripidēs, *Alkēstis* 430-1

- Αδ. αὐλῶν δὲ μὴ κατ' ἄστν, μὴ λύρας κτύπας 430
ἔστω σελήνας δώδεκ' ἐκκληρουμένας.
- アド またこれより十二度、月が満ち終えるまでは、
町中に笛のひびきも、豎琴の絃のしらべも聞こえぬように。²²⁾

エウリーピデース（前 480? - ?406）作の『アルケースティス』（前 438 年上演）のなかで、ペライ Φεραί の王アドメートス Ἀδμητος が長老たちのコロスに命じます。妃アルケースティスの死を悼んで、歌舞音曲を十二ヶ月間、自粛せよということです。

(14)-b Euripidēs, *Helenē* 114

Τε. πολλὰς ^{いくつき}σελήνας, δέκα διεθούσας ἔτη.

テウ 幾月を過ごしたことか、年でいえば十年です。

ヘレネーはつとにトロイアー戦争の原因をつくった絶世の美女として有名ですが、前 412 年上演のこの芝居では、彼女はずっとエジプトにかくまわれていたことになっています。そこで、はからずも彼女の住む館を訪れたテウクロス Τεῦκρος (サラミース王テラモーンの子、大アイアースの異母弟) に、ヘレネーはたずねます、あなたはどれほど長くトロイアーの戦地にいらっしゃったのですか、と。上記はその返事です。

(14)-c Euripidēs, *Iōn* 1155-6

Θε. κύκλος δὲ πανσέληνος ἡκόντιζ' ἄνω 1155

μηνὸς διχρήρης,

従者 ^{ひとつき}一月を半分に分ける望の月輪が光を上方に
放っていました、

ヘーラクレスがアマゾーン族から分捕った戦利品をデルポイのアポローン神殿に奉納したなかに、みごとな織り物がありました。その絵模様的一端としてクレウーサ Κρέουσα (アテーナイ王エレクトエウスの娘) の従者が語るのが上記です。

(14)-d Euripidēs, *Elektra* 1124-7

Ηλ. ἤκουσας, οἶμαι, τῶν ἐμῶν λοχευμάτων·
τούτων ὑπερ μοι θῦσον — οὐ γὰρ οἶδ' ἐγώ — 1125

δεκάτην σελήνην παιδὸς ὡς νομίζεται.

τρίβων γὰρ οὐκ εἴμ', ἄτοκος οὖς' ἐν τῷ πάρος.

エレ わたしのお産のことはお聞きになったと思いますが、どうか、そのことでお式をしてくださいな。わたしにはわからないんですもの。生れた子の十夜のしきたりがあるでしょう。そのしきたりの

とおりにです。わたしはこれまで子供を生んだことがなかったの
で、慣れていないのです。²³⁾

エレクトラーは、周知のように、アガメムノーンとクリュタイメーストラ
ーの娘ですが、父王が母とその情人アイギストス Αἰγισθος によって謀殺されて
からは、名もなき農夫に娶^{めあ}わせられたことになっています。そのエレクトラ
ーの住むむさくるしい農家に実の母を呼び寄せる方策として、彼女は、つい先
頃、お産をしたという嘘報をかつての養育掛かりの老人を使って伝えさせてお
いたのです。事は筋書き通りに運び、下女たちに伴われて、百姓家の前に姿を
見せたクリュタイメーストラーに告げるのが上記の台詞です。ただし、「お式
をして…」は上品にすぎます。原語は θύσον なのですから、「お式」の前に
「犠牲獣を屠って…」とあるべきです。その「犠牲獣」は屋内でアイギストス
に引きつづいて殺されるべきクリュタイメーストラー自身なのですが、それは
さておき、ここでは δεκάτην σελήνην 「十番目の月」に注目しましょう。わが国
には、「おしちや【御七夜】①子供が生まれて十日目の祝い。」(広辞苑)と
いう風習がありますから、ここでは「お十夜」ということになりましょう。

(14)-e Euripidēs, *Alkēstis* 448-51

Χο. Σπάρτα κυκλὰς ἀνίκα Καρνεί-
ου περινίσσεται ὥρα

μηνός, ἀειρομένης

450

παννύχου σελάνας,

コロ スパルタでは、カルネイアのころ、祭の季節が

廻ってくるおり、

夜を徹し、
^{とお}

月影を さやかにいただき。²⁴⁾

カルネイアについて、呉先生は「スパルタにおけるアポロンの大祭、近郊の
アミュクライで盛夏の候九日にわたって挙行された。」と注記しておられます。
私の郷里岐阜県の郡上八幡の徹夜の盆踊りが想起されます。たぶん、月光のも
とで、でありましょう。

(14)-f Euripidēs, *Trōiades* 1075-6

Xo. Φρυγῶν τε ζῆθεοι **σελᾶ-** 1075

ναι συνδῶδεκα ^{ひと}πλήθει

コロ またプリュギア人が神前に捧げまつる、

その数は十余り二つ、月型の餅²⁵⁾

上記は『トロイアーの女たち』（前 415 年上演）のなかから、捕虜となったトロイアーの女たちから成るコロスの歌の一部です。「プリュギア人」はトロイアー人と同義。ここには「聖なる月」とあるのみですが、松平先生は「異説があるが、一応供物用の菓子として解した。」と注記しておられます。私も「月」は「月型の餅」と解します。

残るは喜劇詩人、と言ってもアリストパネースひとりです。

(15)-a Aristophanēs, *Nephelai* (lat. *Nubes*) 16-8

Στ. ἐγὼ δ' ἀπόλλυμαι

ὁρῶν ἄγουσαν τὴν **σελήνην** εἰκάδας·

οἱ γὰρ τόκοι χωροῦσιν.

スト ところがこのおのれは、もう気が気ではないのだ、

お月さまが二十^{はたち}を過ぎるのを見ているとな。

利子が上って来るからさ。²⁶⁾

アリストパネース（前 448? - ?380）の『雲』（前 423 年上演）のなかから、ストレプシアデース Στρεπιάδης の台詞です。彼は馬狂いの息子のために莫大な借金をかかえており、**ἐν τε καὶ νέα** (1134)「旧と新の日」（ひと月の第 30 日）が近づくのを戦々競々と待ちかまえています。晦日勘定をせねばならないからです。でも、その口ぶりからすれば **τάρχαῖα καὶ τόκοι τόκων** (1156)「元金と利子の利子」の支払いは、とてものことに、おぼつかないようです。

(15)-b Aristophanēs, *Nephelai* 749-56

Στ. γυναῖκα φαρμακίδ' εἰ πριάμενος Θετταλὴν
καθέλομι νύκτωρ τὴν **σελήνην**, εἴτα δὴ 750
αὐτὴν καθεύρξαιμ' εἰς λοφεῖον στρογγύλον,
ὥσπερ κάτροπτον, κᾶτα τηροίην ἔχων.

Σω. τί δῆτα τοῦτ' ἂν ὠφελήσειέν σ';

Στ. μηκέτ' ἀνατέλλοι **σελήνη** μηδαμοῦ,
οὐκ ἂν ἀποδοίην τοὺς τόκους. 755

Σω. ὅτιῃ τί δή;

Στ. ὅτιῃ κατὰ μῆνα τὰργύριον δανείζεται.

スト テッサリアの魔女をやとってさ、夜のうちに、お月さんをはずして、
取ってしまうことにしたら、どうだろうね。そしてちょうど鏡を入
れるように、お月さんをかぶと入れの丸い奴に閉じ込めてしまうの
さ。そしてその後は、それをそのまま見張っていることにしたら。

ソー いったいそれが、何の役に立つというのだ。

スト 何の役に立つだって？ もう月がどこへも上らないとなれば、利息
を払うこともいらないだろう。

ソー ふん、それはいったいなぜだね。どうしてだね。

スト そりゃあ、金を借りるのは月ぎめだからさ。²⁷⁾

ストレブシアデースは、息子の説得に失敗したので、自らソークラテース
Σωκράτης の φροντιστήριον (94)「思案所」に入門します。むろん、借金取り撃退
法を学ぶためです。その彼が真っ先に思い付くのは、τὰς τὴν **σελήνην**
καθαιρούσας, τὰς Θετταλίδας (Platōn (前 427? - ?347) 、*Gorgias* 513A) 「あの魔
法によって月を引きおろす女たち、つまりテッサリアの魔女たち」 (加来彰俊
訳『プラトン ゴルギアス』(岩波文庫、1967) 、208 頁) を雇って急場をし
のげないかという「思案」でしたが、所長のソークラテースにはまともに受け
止めてもらえません。ストレブシアデースの頭のなかは、とにかく月末さえ来
なければいい、の一点張りのようです。

(15)-c Aristophanēs, *Sphēkes* (lat. *Vespae*) 96

Ξα. ὥσπερ λιβανωτὸν ἐπιτιθεῖς **νουμηνία**.

クサ まるで新月の祭に香を焚くときのように。²⁸⁾

前 422 年に上演された『蜂』のなかでブデリュクレオーン Βδελυκλέων（「クレオーン嫌い」の意）の奴隷クサンティアース Ξανθίαςの台詞です。この 96 行に附された Douglas M. MacDowell の注（Aristophanes, *Wasps* (Oxford, 1971), p. 143）を引いておきます。‘ἐπιτιθεῖς: putting on an altar ... νομηνία: This and *Akh.* 999 show that the first day of the month was an occasion for religious festivity: ... Hermes and Hekate in particular were honored with frankincense at the new moon (Porph. *Abst.* 2.16.)’ 同じ作者の *Akharnēs* 『アカルナイの人々』（前 425 年上演）999 はクロス同士の台詞です。ὥστ’ ἀλειφέσθαι σ’ ἀπ’ αὐτῶν κάμει ταῖς νομηνίαις. 「かくして御身もこのわしも新月の祭に膏にやいつさいこと欠かぬ。」²⁹⁾ ディカイオポリス Δικαίολοις が勝手にスパルテと和を結んだおかげで、畑からブドウ、イチジク、オリーブが収穫できそうだから、というのがその理由です。最後の Porphyrion は 3 世紀の著述家ですから、前 5 世紀のアテーナイの新月の祭りで崇められた神々のことを、どこまで正しく伝えているのか、断言はできませんが、女神ヘカテーに関しては、彼女はしばしば月の女神と同一視された由ですから、案外、真相を伝えているのかもしれません。

(15)-d Aristophanēs, *Ornithēs* (lat. *Aves*) 494

Ευ. εἰς δεκάτην γάρ ποτε παιδαρίου κληθεῖς ὑπέπινον ἐν ᾧσται,
 エウ いつか小童^{こわっぼ}の十日の祝いに招ばれてね、町でちょいと一杯やったんだ、³⁰⁾

『鳥』（前 414 年上演）のなかの、中年のアテーナイ市民エウエルピデース Εὐελπίδης の台詞です。呉先生の注（244 頁）を引いておきます。「ギリシアでは小児が生まれて十日目に祝宴をし名をつけた。」先に見た(14)-d に出るのと同じ行事ですが、やはり、この場合にも「犠牲獣を屠る」儀式は執り行われたのでしょうか。

(15)-e Aristophanēs, *Nephelai* 612-4

Χο. πρῶτα μὲν τοῦ μηνὸς εἰς δᾶδ’ οὐκ ἔλαττον ἢ δραχμὴν,

ὥστε καὶ λέγειν ἅπαντας ἐξιόντας ἐσπέρας,

“μὴ πρίη, παῖ, δᾶδ’, ἐπειδὴ φῶς Σεληναίης καλόν.”

コロ まず第一には、1 月に 1 ドラクマは下らないだけの、松明代を助けてあげている。だからまた、誰でも夕方の外出には、「月の光がとてもきれいだから、松明を買うのはおよし」と言うことになるのです。³¹⁾

上記は雲の精たちから成るコロスの台詞です。彼らは天上で月の女神に出会ったとき、女神のアテーナイ市民に対する日頃の憤懣を聞かされたというのです。その第一点は、毎月 1 ドラクメ相当の利益を授けてやっているのに、それに見合うお返しがないという功利的な訴えです。これに対するアテーナイ市民の反論は、私たちは新月の祭りにちゃんとお供物を上げていますよ、というものであり得たでしょう。ところで、MacDowell (op. cit. p. 176)によれば Σεληναίης は grandiloquent の由ですから、たんに「月」では物足りないでしょう。「月の女神様」とでもしておきましょうか。

以上、古代ギリシア人の月に対する反応あるいは態度を見てきましたが、ここで総括めいたことを少々。

まず、ホメロスの英雄叙事詩ですが、物語のなかに夜の場面がないわけではありません。たとえば、『イーリアス』第 10 巻、夜の闇にまぎれてギリシア陣内に潜入したトロイア軍のスパイ、ドローンが見つかって殺される「ドローンの段」、また、同第 24 巻息子ヘクトールの屍を貰い受けにアキレウスの陣屋に赴く、一見、大胆不敵な老王プリアモスの行動を語る「ヘクトール贖いの段」の主要部分は日没後の出来事です。前者をも含めて月や星々への言及は皆無です。これもまた、「月光がある時刻にある人物その他を照らすという情景は、英雄叙事詩の伝統的レパートリーの外にあった」という見解を裏付ける材料と言えましょう。

次の悲劇詩人たちは題材を多く英雄時代の人物に採っていますから、叙事詩人と同様、月や星々への関心は大きくはなかったと思われます。けれども、(14)-d の「お十夜」とか (14)-f の「月形の供物用菓子」のような語句は、図らずも前 5 世紀の風俗・習慣を写し出すに至ったものでありましょう。

この点、喜劇詩人は現実に即して自由にものを言えます。アリストパネースの台詞のかずかずは、月に対するアテーナイ人の心情を率直に伝えていると考えられます。しかしながら、彼らは何故、新月の祭りを挙行了たのでしょうか。新月の日に月は出ていないのに……そもそも、満月を愛でることはなかったのでしょうか。これは。名月あるいは仲秋の名月という言葉にあまりに馴れ親しんだ日本人の身勝手な疑念に過ぎないのでしょうか。

結局、月光の美しさを語り伝えるのは、抒情詩人にとどめを指しましょう。とくに、満月を歌ったサッポー(8)-aのなかに出る *κάλαν σελάνναν* は、文字通り、「名月」と解してなんら差し支えなさそうです。やはり、古代人のなかにも、満月を「名月」と賛美する人物がいたのだ、そう考えて私は自らを慰めておきたいと思います。

注

20) 訳文は呉茂一先生のもので。『世界古典文学全集 8 アイスキュロス ソポクレス』（筑摩書房、1964）、52 頁より引用。

21) 訳文は高津春繁先生のもので。同上、133 頁より引用。

22) 訳文は呉先生のもので。『世界古典文学全集 9 エウリピデス』（筑摩書房、1965）、14-5 頁より引用。

23) 訳文は田中美知太郎先生のもので。同上、307 頁より引用。

24) 訳文は呉先生のもので。同上、15 頁より引用。

25) 訳文は松平千秋先生のもので。同上、275 頁より引用。

26) 訳文は田中先生のもので。『世界古典文学全集 12 アリストパネス』（筑摩書房、1964）、108 頁より引用。

27) 同上、208 頁より引用。

28) 訳文は高津先生のもので。同上、133 頁より引用。

29) 訳文は村川堅太郎先生のもので。同上、25 頁より引用。ついでながら、*LSJ* は‘*νοσηνιαστής, οὔ, ὁ, one who celebrates the new moon, Lys. Fr. 53*’を記載していますが、私は出典にあたっていません。

30) 訳文は呉先生のもので。同上、216 頁より引用。

31) 訳文は田中先生のもので。同上、104 頁より引用。